

規模開田地である九戸村、高冷地の開田地である岩手山麓が事例地域として取り上げられ、減反政策と1970年代に発生した大冷害を通して農業の再編成が如何になされたかが論じられている。

具体的には、和賀平野の開田地では集中的に生産調整が一時的に受け入れられた後に、米作への復帰が行われ、大型機械の導入を図って経営の個別化が進められた。九戸村の開田地では、生産調整期に入っても一貫して自給米確保の欲求の強さが示されたが、階層性を帯びた変化もみられた。すなわち、上層農は畑面積を増加させて乳牛の多頭化を進め、中間層は耕地規模を変化させずにタバコに集中し、下層農は畑だけでなく水田面積をも自給水準に減少させた。岩手山麓の開田地では、1976年に発生した冷害に際し、減収率が80%を超える被害を蒙った。その原因として国営事業の計画段階で受益末端の地域条件が等閑視されたことと末端受益者の経済的基盤の脆弱性にあったことなどが指摘されている。

最後に、現代の水田開発の意義・役割と課題が述べられている。意義・役割は、高燥地と寒冷地という限界的条件の下で実現されたものであるため、世界の未開発地域において参考となりうる点にあり、国内的には工業化や都市化による土地利用の変化が進むなかで、減少する農地を補充し、地域分化を可能にした点にあるとしている。課題としては、寒冷な東北日本における水田の比重を一層高め、わが国の食糧生産が冷害危険地域に依存する度合いを高めた点にあるとし、結ばれている。

補章では、本書の方法的な観点となった開発地理学について、開発の概念、開発問題への地理学的アプローチ、開発地理学の方法などが述べられており、ことに方法論の確立のために、開発現象を近代化に伴う地域の再編成の一環として位置づけること、分布論と地域論の役割を重視すること、自然と人間系の接点となる土木事業の分析と開発後の地域変化に目を配ることなどが重要であるとされている。

本書は、北上川流域を中心とする北東北で第二次大戦後に実施された開田について、綿密なフィールド調査に基づき、事業の展開のみでなく、事業後の社会・経済的状況の変化に対応した農業の再編成までを視野に入れて、地理学固有の分布論・地域論的観点から分析が行われている労作である。わが国の二千数百年にわたる水田開発史のな

かに現代の開田を位置づけた書といえるだろう。
(中島 峰広)

大阪市史編纂委員会編：『新修大阪市史』第十巻
大阪市 1996年3月

A5版 本冊490頁 カラー歴史地図11枚
歴史地図解説61頁 6,627円

『大阪市史』は明治34年(1901)日本で最初に市史編纂事業が始められた長い伝統を持っている。

その輝かしい編纂史の中に、新たに画期的な一頁が加えられた。それがこのほど刊行された『新修大阪市史』第十巻 歴史地図編である。大阪市では『大阪市史』以降、『明治大正大阪市史』・『昭和大阪市史』・『昭和大阪市史続編』と全29巻32冊におよぶ市史編纂事業を行ってきた。昭和63年から『新修大阪市史』の刊行が開始され、本書は本文編の完結巻にあたる。

全体構成は総目次・年表・索引・正誤表等を取めた本体冊子と、全11枚からなる折り畳みの歴史地図、およびその歴史地図解説の小冊子から成る。中でも歴史地図は、古代の自然環境から難波京、近世の大坂三郷の構造、近代「大大阪」の景観、現代都市の諸相まで、大阪を研究対象とする地理・歴史学者を中心に最新の研究成果を基にして作成された、日本でも数少ない歴史都市アトラスである。近畿においては京都(足利健亮編『京都歴史アトラス』中央公論社、1994)に続き、大阪にもこのような本格的なアトラスが誕生したことは望外の喜びである。

各地図は縦横60×84cmの寸法で、精緻な描写内容と共に色彩表現にも大変留意された美しいものである。これらは高度に専門的であると同時に、一般の読者にも分かり易く解説するという両面を高い次元で達成させている。図の表題は次の通りである。

- 図1：大阪の地盤
- 図2：大阪市の考古遺跡
- 図3：大阪の古代・中世
- 図4：近世大坂の所領配置
- 図5：天保期の大坂三郷
- 図6：明治前期の大坂一市制施行前
- 図7：昭和初期の大坂一第2次市域拡張後
- 図8：太平洋戦争末期の大坂一昭和20年
- 図9：戦災復興期の大阪
- 図10：現代大阪市の都市基盤整備

図11：現在の大阪都市圏

本歴史地図の特色は、まず本図において現大阪市城を含む全体的な範囲の歴史空間を表現すると同時に、対比的に複数の割図によって同時代の大阪の抱える特定の題材を提示し、大阪の都市空間構造の一端を明らかにする構成にある。例えば図10「現代大阪市の都市基盤整備」では、近代以降の大阪の面的市街地整備と鉄道網・高速道路網を本図で示すとともに、割図において都市計画道路、都市公園の立地を明らかにしており、重層的都市整備の進行を視覚的に知ることが可能となっている。とりわけ、都市計画法制定以降、地区区画整理組合施行地区が近代大阪の都市周辺地域の整備に果たした役割の重要性が、単にその位置を示されるだけではなく、ベースマップの土地利用の現況と比較対象させつつ一枚の図から（また、図7「昭和初期の大阪」とも対照することによって一層深く）読みとることができるとは、鮮やかである。（財）大阪市都市整備協会から1995年までに刊行された資料集成『大阪市の区画整理』全三巻にも、このような地図は収載されておらず、本図が今後の区画整理研究に対しても大きく寄与することが期待される。

また、従来地図化されることの比較的少なかった、民衆の営みの一端が地図化されていることも興味深い。図9「戦災復興期の大阪」では割図において終戦直後に形成された闇市の分布、公衆浴場の分布が示されており、これらは当時の都市住民の生活空間を考察する上で切り放せない貴重なデータである。

ただ一つ欲を言えば、図3「大阪の古代・中世」において「中世後期の町」として大阪石山本願寺

寺内の範囲が示されていないのは残念であった。例えばほぼ同時期の天満本願寺寺内はその推定範囲が図示されており、他には同じ寺内町として久宝寺寺内、あるいは四天王寺門前、平野、堺が表記されている。大阪石山本願寺寺内町の正確な範囲は不明確であるし、その説も伊藤毅(1987)・仁木宏(1994)・藤田実(1996)・拙稿(1996)と分かれるが、「石山本願寺寺内」の文字だけでなく、『新修大阪市史』第二巻631頁で示されている伊藤説の範囲であっても、中世末の大坂を考える場合に重要な場所であるが故に寺内町の推定範囲を図示していただきたいかった。また本書の内容とは直接関係は無いものの、歴史地図解説が本巻とは別冊子である体裁や、折り畳み地図の保存・耐久性等にも検討の余地が残されている。

歴史地図作成に関して、解説の凡例では、「大阪市史1～9巻の理解を助けるため、各時代にわたって作成したものである」と記されている。しかしそれは単に本文の理解促進に役立つという補完的な存在では勿論ない。情報量・資料的価値が非常に高く、一目で容易に大阪の歴史を俯瞰することができる点は、文字だけでは成し得ない地図の力である。十一枚の素晴らしい地図が相互に関連合いながら、まさに大阪の歴史や文化、そしてそこに住む人々が営々と築いてきた生活行為の痕跡を雄弁に、生き生きと物語ってくれる。故矢守一彦・大阪大学名誉教授をはじめとして、執筆・製図・編集に携わられた方々の、大阪という地域と、地図表現に対する飽くなき情熱が伝わってくる、学術的に極めてレベルの高い歴史都市アトラスである。

第173回例会発表要旨

中世骨寺村絵図の歴史地理学的調査中間報告

國學院大学地理学教室

近年、中世荘園遺跡の現況記録保存や史跡指定にむけて、荘園故地の歴史地理学的調査が各地で進められている。こうした調査の一環として、國學院大学地理学教室では、1994年度より平泉中尊寺経蔵別当所領であった陸奥国磐井郡骨寺村の故地、岩手県一関市本寺地区の歴史地理学的調査を進めてきた。

骨寺村は、奥州平泉文書(経蔵文書)や二葉の中世骨寺村絵図によって、中世の開発状況や農村

景観を窺うことができる希有の事例である。全国的に展開した圃場整備事業やその他の大規模な開発によって、わが国の伝統的な農村景観は破壊されつくしたかのように思われるが、その中で本寺地区はたまたま近年の大きな景観変化の影響を受けず、伝統的な農村景観の片鱗を留めているので、中世における東北地方農村の景観を考察するための格好の事例となる。

歴史地理学的調査は主として次の7つの項目からなる。

1. 諸宗教施設(骨寺堂跡、ミタケ堂、宇那根